

第1章 教育新時代の幕開け…………… 11

- 教育活動の主体は誰なのか?…………… 12
- 従来の日本型教育のおわりのはじまり…………… 26
- これから求められる令和型学級づくりを考える…………… 38

第2章 令和型新教育観へのアップデート…………… 51

- 令和型新教育観にアップデート…………… 52
- 教師力の捉え方をアップデート…………… 56
- 学校教育観をアップデート…………… 80

第3章 秩序…………… 105

- 子どもたちを自由にさせると学級が崩れる?…………… 106
- 学習規律を見つめ直す…………… 108
- 学級崩壊は「秩序」がなくなるから起こる…………… 111
- 子どもたちが好きな教師とは?…………… 116
- 秩序を乱さないために…………… 118

第4章 遊び…………… 147

- 授業で負った傷は授業でしかケアできない…………… 148
- 授業で負った子どもの傷をケアする…………… 151
- 楽しい授業のためにタブレットをフル活用する…………… 160
- 「遊び」から「遊び」に…………… 165
- 「遊び」の「学び」に…………… 173

第5章 自己選択……………193

「自己選択」をさせる……………194

「自己選択」が活きる学級づくり……………197

「指導の個別化」と「学習の個性化」と「日常生活の自律化」……………199

保護者と「教育観」の擦り合わせをしておく……………204

指示を出さない……………212

プロジェクト型係活動……………218

学習方法を「自己選択」する……………226

学習課題を「自己選択」する……………236

# 学校教育観をアップデート

## ――従来の学校教育観とこれからの時代の学校教育観――

巷には様々な教育実践、教育書があふれています。そのほとんどが、教師が子どもたちをハンドリングするといった前提で書かれています。つまり、子どもは教師に教えられべき存在であり、教師が子どもをどのようにハンドリングし、指導すればよいのかといった前提で書かれています。しかし、第1章で書かせてもらったように、これからやってくる新しい時代においては、教師が子どもたちをハンドリングすることがとても難しくなってきました。

タブレットを活用した授業づくりや学級づくりの実践がかなり増えてきています。しかし、それら多くの実践は今までの学校教育観ではおそらくフィットしにくいと考えられます。

す。子どもたちにタブレットの活用を促すことは子どもたちの個別化を促進させますし、子どもたちがタブレットを活用すればするほど教師のハンドリングが難しくなるからです。また、教師が子どもたちのタブレット活用を管理しようとする、タブレットの教育的効果は大きく下がるでしょう。教師がトップダウン的に子どもたちにタブレット活用させている実践は本当の意味でのタブレットを有効活用している実践ではありません。タブレットは子どもたちに自由に活用させてこそ教育的効果が上がります。なお、ここでいう教育的効果とは成績が向上するといった表層的なことを指しているわけではありません。

タブレットを有効に活用した教育実践は、今までの学校教育観とは親和性が低く、うまく機能しない可能性がとても高いのです。一方、これまでに本やセミナーで紹介されてきたタブレットを活用しない実践は自分なりにカスタマイズをすれば、質を抜きにすれば目の前の子どもたちにある程度フィットさせることができました。その理由は、それらの実践が従来の教育観を前提としてデザインされていたからなのです。しかし、タブレットを活用した教育実践は、今まで主流だった教師が子どもたちをハンドリングするといった教育観でデザインされていません。つまり、そもそも前提となる教育観がちがうのです。前提となる教育観がちがうので実践が機能しにくいのです。タブレット活用が主流となるで

あろうこれからの時代。そして、価値観の多様化が進むこれからの時代。繰り返しになりますが、未来の学校では、子どもたちをハンドリングしてきた従来の学校教育観で学校教育を推し進めていくことがおそらくとても難しくなっていくことが予想されます。だからこそ従来の学校教育観をアップデートし、子どもたちをハンドリングしない学校教育観に舵をきっていくことが必要だとわたしは考えています。では、これからの時代の学校教育観とは一体何なのか。みなさんと一緒に考えていこうと思います。

### —— 今までの学校教育を疑ってみる ——

今までの学校教育で何の疑いもなく、当たり前だと思ってる実践はありませんか。

例えば、日直制度。多くの先生方は日直制度を学級内で敷いていることでしょう。わたしはここ数年、学級で日直制度を敷いていません。日直がないことでの不便さを感じたこともありません。そもそも、なぜ日直が必要なのでしょう。日直が覇気のないあいさつをするくらいだったら、やる気があって元気な子どもにあいさつをさせた方が教室に活気

がうまれます。また、日直の仕事は当番活動でも十分に賄えます。

宿題はどうでしょうか。特段疑問ももたずに多くの先生方は一斉一律に宿題を出しているでしょう。でも、よくよく考えてみると、宿題って本当に必要なのでしょう。学力の高い子にとってはただの作業でしかなく、学力の低い子にとったら苦行でしかありません。家庭学習の習慣づけに宿題は必要だといった声もよくあがります。でも、家庭学習の習慣づけに本当に役立っているのでしょうか。

そう考えてみると、他にも「？」な実践が多くあることに気づくと思います。子どもたちに漢字テストで間違えたところを何回も何回もひたすら書かせる実践は根性論や苦勞は美德だといった価値観でデザインされています。

このように今まで何の疑いもなく、当たり前だと思ってきた実践を

- ・ その実践はそもそも何のためにおこなっているのか
- ・ その実践は「子どもたちの育ち」に寄与しているのか

といった視点で改めてゼロベースで学校教育を見直してみる必要があると思います。日直制度や宿題を否定しているわけではありません。目の前の子どもたちにとって「子どもの育ち」につながるベストな教育環境は一体何なのかを教師が考え、デザインし、実践していくべきだということを伝えたいのです。なお、「子どもの育ち」についてわたしは、

- ・子どもの解像度が上がる
- ・子どもの自尊心が高くなる

ことだと考えています。

目の前の子どもたちを成長させるために、宿題や日直が必要だと感じたのであれば実践すればいいでしょうし、必要がないと判断したのであれば実践しなればいいのではと考えています。学校で当たり前のようにおこなわれている数多くの教育実践を白か黒のどちらか二者択一で選ぶのではなく、白と黒の間に無限の色があり、その中からベストな選択、

よりベターな選択をしていくマインドをもつことが大切なのです。どの教育実践がよくて、どの教育実践がダメなのかといったことは安易には判断できないものなのです。

### なぜ、若手教師の学級づくりが成功し、ベテラン教師の学級づくりが失敗するのか

先生方の中で、教師になって間もない若手教師の学級が崩れず、腕があると評される中堅、ベテラン教師の学級が大崩れしてしまった現場を目の当たりにしたことがあるかもしれません。わたしも何度か目の当たりにしたことがあります。その度に、なぜそういった状況が起こってしまうのかが不思議でなりませんでした。先ほど、教師力が、

教師力

||

着せ替え力

×

解像度

(知識・スキル × 自己変革力)

図6 | ベテラン教師と若手教師の教師力の例

[例]

ベテラン教師			
知識・スキル	自己変革力	解像度	教師力
6	× 1	× 5	= 30

  

若手教師			
知識・スキル	自己変革力	解像度	教師力
2	× 8	× 2	= 32

※各項目10ポイントを上限とする

であると書かせてもらいました。わたしは、教師力はビルのようなものだと考えています。

ベテラン教師の学級づくりがなぜ失敗するのかを、この公式から考えてみようと思います。教師だけでなく、様々な企業でも勤続年数が長くなると成功体験にしがみつきがちになると言われています。また、プライドが邪魔をして素直に他人の意見を受け入れにくくなるとも言われています。つまり、知識やスキルがあったとしても自分を変えることができず、結果として着せ替え力が低くなってしまっているのです。着せ替え力が低くなってしまえば、解像度が高かったとしても教師力は高くなりませ

ん。少し極端な例をあげてみます(図6)。この例にあるように、知識・スキルをもっているでも自己変革力が低ければ教師力が低くなってしまいます。逆に、知識・スキルがあまりなかったとしても自己変革力が高ければ教師力が高くなります。これがベテラン教師の学級づくりがうまくいかなく、若手教師の学級づくりがうまくいくポイントだと考えられるのです。

では自己変革力を伸ばすには具体的にどうすればよいのでしょうか。そのヒントが、経営コンサルタントの船井幸雄が提唱する「成功の3条件」にあります。船井氏が提唱する「成功の3条件」とは「素直」「プラス発想」「勉強好き」です。

- ・素直………意見を素直に受け入れ、やってみる
- ・プラス発想………「こうだからできない」ではなく「こうすれば、できるかもしれない!」  
と考える

- ・勉強好き………いつでも、誰からも、どんなことから、自分以外から学ぶ